みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ユネスコ非加盟の台湾からの世界遺産登録に向けた動き：社会的文脈によって揺れる文化遺産

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤野, 陽平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006064

河合・飯田編『中国地域の文化遺産 ── 人類学の視点から』
国立民族学博物館調査報告　136:163–178(2016)

第 8 章　ユネスコ非加盟の台湾からの世界遺産登録に向けた動き
── 社会的文脈によって揺れる文化遺産 ──

藤野　陽平
北海道大学

近年、世界遺産関連の話題はますます盛り上がりを見せているが、台湾には世界遺産が 1 ヶ所も登録されていない。これは台湾に後世に残すべき人類の遺産がないというわけではなく、中華民国（台湾）がユネスコに加盟していないということや中台関係が大きな要因である。こうした状況に対して台湾側にも「台湾世界遺産潜力点」として18か所の世界遺産登録候補地を設定し、アピールするという動きが見られている。そこで本稿では台湾世界遺産潜力点について簡述した後、18か所の中の 1 つで、これまで 9 つの外来文化の影響を強く残している新北市に位置する「淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群」を紹介する。最後に台湾世界遺産潜力点がいかなる社会的文脈の上に位置づけられるのかを確認し、その特徴として台湾アイデンティティの強まりや、日本との関係性を分析する。

1　はじめに
2　台湾の世界遺産登録へ向けた動き
3　淡水紅毛城及其週遭歴史建築群
4「台湾世界遺産潜力点」と台湾の置かれている社会的文脈
5　おわりに

キーワード: 台湾世界遺産潜力点、淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群、台湾基督長老教会、ジョージ・レスリー・マカイ、新北市

1　はじめに

唐突ではあるが、台湾に世界遺産がいくつあるかご存じだろうか。台湾研究者には常識的なことなのだが、それ以外の方にはあまり知られていないことなのではないだろうか。実際に筆者が観光や世界遺産を専門に研究する人達にこの問いを投げかけみたところ、正確に答えられる人の方が少なかった。参考までに、東アジアの他の国々の例を挙げておくと、大韓民国は10ヶ所、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）は 2 ヶ所、本書の主たる対象である中華人民共和国はさすがに多く、45ヶ所。日本国も17ヶ所となっている。では、本題の台湾に幾つの登録があるかと言われれば、 0 ヶ所となっている。というのも、本発表のタイトルにもあげているように台湾はユネスコに加盟していない。そのことが、登録への大きなハードルとなる。世界遺産条約第31条 1 には以下のような記述がある。

「この条約は、国際連合教育科学文化機関の各加盟国により、それぞれ自国の憲法上の手続に従って批准され又は受諾されなければならない。」

世界遺産条約は1971年に国連の代表権が中華民国から中華人民共和国へ移行した翌1972年に締結されており、台湾は本条約を締結していない。そのために「批准され」ることも、「受諾され」ることもできていない。

しかし、上記31条 1 だけで世界遺産として認定されるわけではない。続く第32条 1 には「この条約は、国際連合教育科学文化機関の非加盟国で同機関の総会が加入を招請したものの加入のために開放する」とあり、ユネスコの非加盟国や世界遺産条約の非締結国であっても世界遺産として登録される可能性を残している。実際にユネスコ非加盟国のバチカン市国でも、 2 ヶ所が登録されている[1)]。また、アメリカ合衆国は1984年にユネスコから脱退、2003年に復帰しているが、その間にも 6 ヶ所[2)]が登録され、1985年に脱退し、1997年に復帰したイギリスも同期間に16ヶ所[3)]が登録されている。

このように考えればユネスコに加盟していないことのために、即ち世界遺産へ登録ができないというわけではなく、非加盟国である台湾の文化遺産も、世界遺産に登録される可能性が残されていることとなる。実際に台湾からも世界遺産化を目指そうという動きがみられる。そこで、本稿ではユネスコ非加盟国、台湾における世界遺産化をめぐる動向を紹介することで、本書がめざす中国地域における文化遺産の理解を深めうる新たな視点を提示したい。

2　台湾の世界遺産登録へ向けた動き ──「台湾世界遺産潜力点」を例に

台湾におけるオフィシャルな世界遺産登録の動きとして、文化部の「台湾世界遺産潜力点（以下、潜力点）」があげられる。この潜力点には現在18ヶ所の候補地が登録されており（表 1 参照）、文化遺産は10ヶ所、自然遺産 5 ヶ所、複合遺産 3 ヶ所となっている。

まず、潜力点に関する歴史を簡単に説明する[4)]。1981年11月11日に行政院文化建設委員会（現・文化部、以下、文建会）が、統一的な国家的文化政策立案のため、全国や地方の文化発展のため、政策企画やファシリテータの役割を果たすために設立される。

潜力点に関する動きを見せ始めたのは2002年のことで、文建会が国内外の専門家や市町村政府や地方文史工作室に推薦させ、「「世界遺産」潜力之潜力点名単」を作成した。これをもとに開かれた評選会が11の「台湾世界遺産潜力点」を選出する（太魯閣国家公園、棲蘭山檜木林、卑南遺址与都蘭山、阿里山森林鉄路、金門島与烈嶼、大屯火山群、蘭嶼集落与自然景観、紅毛城及其周遭歴史建築群、金瓜石集落、澎湖玄武岩自然保留区、台鉄旧山線）。同年、イコモスの西村幸夫、日本イコモスの杉尾伸太郎副会長、オーストラリア人建築師 Bruce R. Pettman 等の有識者を台湾に招き、上記11ヶ所の他に、玉山国家

公園も潜力点に加えられた。2003年には上記、11ヶ所に、玉山国家公園を加えた12ヶ所を「台湾世界遺産潜力点」として正式に発表する。

2009年２月18日文建会は関係単位、専門家を招いて、第１次「世界遺産推動委員会」を開催し、「金門島与烈嶼」に馬祖島を加えて「金馬戦地文化」とすることと、新たに５ヶ所（楽生療養院、桃園台地埤塘、烏山頭水庫及嘉南大圳、屏東排湾族石板屋集落、澎湖石滬群）を「台湾世界遺産潜力点」に加えることを検討しはじめる。８月14日の第２次「世界遺産推動委員会」では、第１次「世界遺産推動委員会」の内容を受け、台湾世界遺産潜力点を17ヶ所とする。

表１　「台湾世界遺産潜力点」一覧[5)]

	名称（中文）	名称（日文）	所在地	推薦時期
文化遺産	淡水紅毛城及其周遭歴史建築群	淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群	新北市	2003
複合遺産	台鉄旧山線	台鉄旧山線	苗栗県，台中市	2003
複合遺産	阿里山森林鉄路	阿里山森林鉄道	嘉義市，嘉義県，南投県	2003
自然遺産	澎湖玄武岩自然保留区	澎湖玄武岩自然保留区	澎湖県	2003
文化遺産	金門戦地文化	金門戦地文化	金門県	2003
自然遺産	大屯山火山群	大屯山火山群	台北市，新北市	2003
文化遺産	水金九砿業遺址	水金九砿業遺址	台北市，新北市	2003
自然遺産	棲蘭山檜木林	棲蘭山ヒノキ林	宜蘭県，新竹県，桃園県，新北市	2003
自然遺産	太魯閣国家公園	太魯閣国家公園	花蓮県，台中市，南投県	2003
自然遺産	玉山国家公園	玉山国家公園	花蓮県，嘉義県，南投県，高雄市	2003
文化遺産	卑南遺址与都蘭山	卑南遺跡及び都蘭山	台東県	2003
複合遺産	蘭嶼集落与自然景観	蘭嶼集落及び自然景観	台東県	2003
文化遺産	馬祖戦地文化	馬祖戦地文化	連江県	2009
文化遺産	楽生療養院	楽生療養院	新北市	2009
文化遺産	桃園臺地陂塘	桃園の埤塘	桃園県	2009
文化遺産	烏山頭水庫及嘉南大圳	烏山頭ダム及び嘉南大用水路	雲林県，嘉義縣，台南市	2009
文化遺産	排湾族及魯凱族石板屋集落	パイワン族及びルカイ族の石板屋集落	屏東県	2009
文化遺産	澎湖石滬群	澎湖石滬（シーフー）	澎湖県	2009

2010年10月15日の民国99年度第２次「世界遺産推動委員会」にて金門島と馬祖島は文化的に異なるために「金馬戦地文化」を「金門戦地文化」と「馬祖戦地文化」の２つに分けることとし、合計18ヶ所となる。

2011年12月19日の民国100年度第２次「世界遺産推動委員会」において世界遺産への推薦に適するように「金瓜石集落」を「水金九砿業遺址」と、「屏東排湾族石板屋集落」を「排灣及魯凱石板屋集落」と名称を変更した。

2012年３月３日に開かれた「専家学者諮詢会議会」において、音、意義、語源や歴史、

機能などを考えて「埤」塘を「陂」塘と修正した。

2013年12月３日の第10次「世界遺産推動委員会」において「排灣及魯凱石板屋集落」を「排湾族及魯凱族石板屋集落」と名称を修正した。

3　淡水紅毛城及其週遭歴史建築群

それでは潜力点のうち文化遺産にかかわるものを紹介するが、自然遺産を除いた13ヶ所全ては紙幅の関係で難しい。そこでそのうち最も観光客から利用されているものの１つとみられる「淡水紅毛城及其週遭歴史建築群」（日本名：淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群）を取り上げることとする。新北市淡水区は淡水河河口付近の港町であり、人口約15万人、面積70.65平方km、新北市八里区、三芝区、台北市北投区と隣接し、淡水河の河口に位置する。台北駅からMRTで北へ30分程度で到着するアクセスのよい土地であるうえ、30ほどの古跡が密集しており、観光客にとって18か所の世界遺産候補地の中で最も魅力的な場所の１つである。旅行者用のガイドブックにも必ず掲載されているほど有名な観光地でもある。小吃という軽食や、夕日を鑑賞するスポットとしても知られ、週末の夕方ともなれば外国人観光客のみならず、台湾の各地からも多くの人が訪れる。

歴史の概要として、元々、原住民が暮らしていた淡水を17世紀にスペイン人（1628年）、オランダ人（1642年）が占領した。1684年に清朝の版図になり、その後、漢族が移住する。1858年に天津条約によって、開港し、台湾を代表する港となっていく。また、淡水は1871年以降のカナダ人宣教師によるキリスト教宣教の最初期の舞台でもある。最初の宣教師はジョージ・レスリー・マカイ（George Leslie MacKay、中文：偕叡理、通称：馬偕）というカナダ人で、キリスト教宣教の他、医療活動、教育活動も実施した。そのために、この土地には原住民、オランダ、スペイン、漢人、イギリス、カナダ、日本といった複数の外来の文化が重層的に入り組み合って、独特な景観を形成している。なお、淡水という地名は日本統治期に改められたもので、それ以前は滬尾とよばれていた。

以下では多くの観光客がたどるとみられるルートで「淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群」を振り返ってみたい。大多数の観光客はMRTの淡水駅から歩き始める。そこから老街と呼ばれる中正路を西へ進むと右手に市場が見えてくる。この中に位置するのが淡水龍山寺（中山路95巷22号、写真１）と淡水清水巌祖師廟（清水街87号）である。龍山寺は1858年設立、台湾の五大龍山寺の１つである。清水巌は1937年設立、旧暦５月５日から６日に行われる清水祖師の巡行は淡水の最もにぎやかなひと時である。両者は市場の中に位置しており、一般の観光客の目に触れやすい場所には位置していない。観光客も少なくはないが、それよりも現地の信仰の場としての意味合いも見落とせない。中正路をもう少し進むと右側に位置するのが天上聖母（媽祖）を祀っている淡水福佑宮（中正路200号、写真２）である。1796年に設立した本廟は淡水で最も古い廟である。


写真１　淡水龍山寺


写真２　淡水福佑宮

老街を進み、建設街、三民街との交差点にマカイ牧師の彫像が見えてくる。そこから馬偕街に入ると右側に隣り合って位置するのが滬尾偕医館（馬偕街６号、写真３）と、台湾基督長老教会淡水教会（馬偕街８号、写真４）である。滬尾偕医館はマカイ牧師が1872年淡水に到着し、キリスト教宣教を開始した後、診療をはじめた場所である。1873年に別の民家を借りて診療所とし、名を「滬尾医館」とした。1879年にはマカイというアメリカ国籍の船長の未亡人から寄付金2,500米ドルが寄せられ、今日の淡水馬偕街の診療所となり、マカイ船長の未亡人の寄付を記念し名を「滬尾偕医館」とした。現在、台北の有数な私立病院である「マカイ記念病院」の前身である。現在は当時の医療やマカイ牧師についての展示を行うほか、喫茶店も併設されている。


写真３　滬尾偕医館


写真４　台湾基督長老教会淡水教会

マカイは淡水に上陸しキリスト教宣教を開始したが、淡水教会はその最初期の教会である。現在の礼拝堂はマカイ牧師の息子G.W.マカイが設計監督したもので、1933年に

完成した。近年教会の前方の敷地を買い取り、観光客向けの撮影スポットにもなっている。この近辺にはマカイの上陸地点、最初の借り屋等もあり、キリスト教と近代化と関連した景観が形成されている。

老街に戻り、少し進むと右側にダグラス洋行（徳忌利士洋行、中正路316号）が目に入る。スコットランド商人ダグラスが設立した香港の会社で、当時は多数の汽船と広い埠頭を有していたという。2013年に修復され、当時の淡水に関する展示を行っている。

老街を離れて、真理街へと足を進めると左手に白い建物が見えてくる。ここが小白宮（リトル・ホワイトハウス）と呼ばれる前清淡水関税務司官邸（真理街15号、写真５）である。淡水を開港した後に1862年に滬尾洋関が発足した。外国人スタッフのための官邸や宿舎が必要となり、1866年に土地を取得し1869年に完成した３棟の現存する１棟である。マカイの旧宅などと同様バンガロー建築で、西洋風のアーチ形回廊等の建築的特徴をもつ。

前清廷淡水總税務司官邸のすぐ隣に位置するのがミッションハウス（教士会館、真理街32号）、マカイの旧居（馬偕故居、真理街26号、写真６）、姑娘楼（真理街32号）、牧師楼（真理街32号、写真７）の一連の旧宣教師宅である。ミッションハウスは1875年にマカイが建設しマカイのアシスタントの宣教師らが使用した。宣教師たちが帰国した後には無料の女子教育の校舎や男子学生の寮になっていたこともあるが、戦後は真理大学の学長の宿舎になっていたこともある。2009年からは宣教師を記念するための施設とな



写真５　前清淡水関税務司官邸



写真６　マカイの旧居



写真７　牧師楼



写真８　牛津学堂

っている。マカイの旧居はマカイ自ら設計し1901年に没するまでここで余生を過ごした。彼の没後は他の宣教師やマカイの息子が使用したり、未亡人のための施設、淡江中学の男子学生の寮としても使用されたりした。戦後はマカイの息子が再度台湾に戻り1952年まで使用し、1965 年からは真理大学の施設となった。姑娘楼は台湾に来た女性の宣教師、教育、医療従事者のための宿舎で、現在は真理大学の学長室と秘書室として使用されている。牧師楼は男性宣教師のための宿舎で1909年完成。現在は軽食もとれるカフェになっている。これらはいずれもバンガロー建築で、マカイが設計したミッションハウスと旧居以外はカナダ人宣教師ゴールド（William Gauld　呉威廉）が設計した。４つの建築物のいずれもすばらしい眺望で、庭園もよく手入れされている。

牧師楼のすぐ向かい側が真理大学であるが、内部に牛津学堂（Oxford College、真理街32号、写真８）と呼ばれる理学堂大書院がある。1880年に一時カナダに帰国したマカイが、学校設立のための募金を故郷のオンタリオ州オックスフォードで呼びかけ、総額6,215カナダドルを集め、1881年淡水に戻り、本校の建設に取り掛かり、1882年７月にこのレンガ造りの建築を落成させた。カナダのオックスフォードの住民を記念するために「理学堂大書院（牛津学堂）」と名付け、キリスト教神学だけではなく、文学、科学、医学なども講義され、北部台湾の近代教育の基礎となった。現在は真理大学校史館として使用されている。

真理大学のすぐ横が淡江中学（真理街26号）である。1884年にマカイは「淡水女学校」（Tamsui Girl’s School、写真９）を創設する。女性が教育を受けることが困難であった当時、年齢制限もなく女性が入学できる本校は画期的であった。マカイの没後に一時中止となったものの、1907年に日本の教育制度に合せて淡水女学校として12～15歳の女学生の教育をおこなった。しかし、それまでの淡水女学校で行っていた年齢制限のない教育ができなくなったため、1910年に「婦学堂」（Women’s School）を設立し、教育の機会が与えられない女子への教育を行った。婦学堂は現在、淡江中学の校史館として使用されて



写真９　淡水女学校

いる。その他敷地内に、1925年に完成した「八角塔」（写真10）や、マカイ一家の墓園「馬偕墓園」（写真11）と淡水で没した外国人のための墓園「外僑墓園」等があり、いずれも歴史的にも芸術的にも価値のあるものである。



写真10　八角塔



写真11　馬偕墓園

真理大学と接しているのが「淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群」の中心である紅毛城（中正路28巷１号、写真12）である。紅毛城の歴史は1628年にスペイン人が建築したサン・ドミンゴ城（Fort San Domingo）にさかのぼるが、現存する紅毛城の基礎は1644年にオランダ人が建てたアントニオ要塞（Fort Antonio）にある。清朝期に城門が修築されるなどし、1863年にはイギリスが期間99年で租借し、第二次世界大戦中は閉鎖されるも、1946年にイギリスに戻された。しかし、中華民国とイギリスの国交断行後の1972年には領事館が撤去され、その後はオーストラリアやアメリカが使用した[6)]が、1980年に中華民国に返還された。なお、隣接する清朝英国領事館は19世紀末に建てられた。こうした歴史を象徴的に表すため、紅毛城にはスペイン、オランダ、明の鄭氏、清朝、イギリス、日本、オーストラリア、アメリカ、中華民国の９つの旗が掲げられている。



写真12　紅毛城

中正路をさらに進み、台湾ゴルフクラブの方へ右折すると滬尾砲台（中正路一段６巷34号）がある。清仏戦争後台湾海峡の防衛強化のため、1886年に台湾巡撫劉銘伝がドイ

ツ人技師の協力を得て建設し、イギリスから購入したアームストロング砲が据え付けられたが、実際に戦争で使われることはなかった。東南部に門があるが門額には劉銘伝が書いた「北門鎖鑰」の文字がみられる。

以上、駆け足で文化遺産としての世界遺産候補地、「淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群」を紹介してきた。しかし、ここで紹介できたのは本建築群の主要なものだけである。淡水古跡博物館のリストによれば（http://chweb.culture.ntpc.gov.tw/pages/list1.aspx?Node=2966&Type=1&Index=2&WID=560d2ade-378e-4cb6-8cb4-c2ce2b227759）、淡水には古跡が30近くあるとされており、これら全てをここで紹介することはできない。いずれにせよ、台湾の有史以来多くの外来者が持ち込んだ重層的な文化的景観が形成されており、異国情緒あふれる港町が「多元的な文化が集結し、北台湾の各地の起点の１つ」と評価されている。

4　「台湾世界遺産潜力点」と台湾の置かれている社会的文脈

ここからは潜力点全体のもつ問題や特徴について考えてみたい。潜力点の18ヶ所をみてみると、疑問が幾つか生じる。第１に何故、1972年の世界遺産条約から、最初の「台湾世界遺産潜力点」指定の2002年までの30年ほども空いたのだろうかということであり、第２に潜力点の選択に偏りはないかということである。概観すると日本統治期に由来するものが多く、いわゆる台湾の漢族の「伝統」文化が極端に少ないように見受けられる。

4.1　2000年代に活発化した台湾の世界遺産登録

それまで世界遺産登録に向けて特に動きを見せなかった台湾が、この時期になって活動を始めた理由を考える上で、当時の社会背景を知る必要がある。この時期は台湾の民主化が進んだ李登輝の本土化政策から、2000年から2008年までの民進党政権下で台湾アイデンティティがさらに高まった時期であり、世界遺産登録に向けた動きと連動しているとみていいだろう。当時の台湾アイデンティティの高まりを、象徴的に示す運動として台湾正名運動があげられる。

台湾正名運動とは台湾にある「中国」や「中華」といった名称が付く団体や企業名を「台湾」に改めようというもので、2003年９月６日には李登輝前総統も参加し、大規模なデモが行われ参加者は主催者発表で15万人、警察推計で７万３千から７万５千ほどだったという［中川　2003］。

以下、いくつか代表的な例をあげておく。2003年９月には国号を中華民国（英文 Republic of China）から、中華民国（台湾）（同 Republic of China Taiwan）へと変更し、それにともないパスポートの名称も中華民国（台湾）となっている。それまでは中華人民共和国を表す People’s Republic of China と間違われ、不要な誤解を招くことも少なくなか

ったという［伊藤　2003ほか］。その他にも2006年９月には蒋介石を表す中正を名に冠した中正国際空港を台湾桃園国際空港へ改称し、2007年には郵便局にあたる中華郵政は台湾郵政股份有限公司に、中国造船公司は台湾国際造船公司に、中国石油公司は台湾中油股份有限公司に改称、蒋介石を記念する建築物「中正紀念堂」も蒋介石色を薄めるため「台湾民主紀念館」に改称した。

こうした台湾正名運動であるが、その評価についていくつか紹介しておく。台湾独立派系の代表的な新聞、自由時報の駐日特派員、張茂森は「台湾正名運動は台湾人のアイデンティティを確立するもの」［張 2002］と、アイデンティティの問題と関連するとし、台湾の政治史を研究する伊藤潔は「国名を「中華民国」から「台湾」に改め、そして国際連合への加盟を推進するという運動」［伊藤 2003］と国連加盟を視野に入れた運動であるとし、台湾独立派の宗像隆幸は台湾国憲法の制定を台湾正名運動の本質と考えている［宗像 2006］。このように当時の台湾正名運動にみられる、台湾アイデンティティの高まりは、単に中華・中国を台湾に変更するだけではなく、台湾名称での独立、国連参加を目指す大きなうねりであった。台湾からの世界遺産登録の動きは時期的に、偶然、この時期に起きたというより、どうみてもこの時期に緑陣営がしかけたものの１つと見るべきで、台湾を中国から独立させようという流れに位置づけられるべきである[7)]。

台湾正名運動に対して2008年以降の国民党政権下で、反発する動きがみられる。具体的には2008年８月に台湾郵政股份有限公司は中華郵政股份有限公司に、2009年には台湾民主紀念館が中正紀念堂へと名称を戻している。当然、台湾アイデンティティの高まりによって進められた潜力点も方針に変更がみられる。上記2009年２月18日の第１次「世界遺産推動委員会」、８月14日の第２次「世界遺産推動委員会」による５ヶ所の追加以降、大きな動きは見られない。たしかに2009年は国民党政権期ではあるのだが、準備期間を考えれば民進党政権期に進められていたものと見るべきだろう。実際にその後の動きとしては名称変更や、１ヶ所を２ヶ所に分ける程度のことで、新たな潜力点の登録には至っていない。否定はしないものの、積極的に推進するということでもないというスタンスをとっている。

こうした消極的な姿は現在の観光客誘致の姿にも表れている。例えば台湾の観光協会のウェブサイトには世界遺産や「台湾世界遺産潜力点」に関する記述はみられない。観光客誘致のための主要なコンテンツである世界遺産は、各国の観光協会のウェブサイトの目立つところに特設サイトが用意されていることが多い。例えば中国では中国国家観光局大阪駐在事務所のサイト（www.cnta-osaka.jp）がある。ここではトップページの一番目立つところに「世界遺産」という項目が用意されている。韓国でも、韓国観光公社のサイト（japanese.visitkorea.or.kr）では右側に「京畿道世界遺産めぐり」という表示がされ、「観光スポット」の中、「テーマ」に、「世界遺産」のサイトが用意されている。確かに、台湾の場合、世界遺産ではないから仕方がないという見方もできなくもない。しかし、

世界遺産の候補地であるというだけでも十分宣伝効果が見込め、例えば長崎県観光連盟のウェブサイト「長崎旅ネット」（www.nagasaki-tabinet.com）にはトップページの最上位に「２つの世界遺産候補[8)]」とし、積極的に観光客誘致に利用している。観光客からすれば、候補地であろうと十分訪れる価値のあるものと捉えられているということであろう。もし、台湾側に積極的に潜力点に関してアピールしようというのであれば、観光客向けに情報をだしてもいいだろうし、それをしてはいないことは、あまり積極的ではないということの証左となるであろう。

この点について実際の現場ではどのようになっているかといえば、例えば紅毛城の観光案内所で本件について問い合わせてみたところ、１ケ所紅毛城のパンフレットに「2003（民国92）年には、行政院文化建設委員会文化資産総管理処籌備処から世界遺産登録申請に最もふさわしい建築物の１つとして評価されています」と書かれていることを紹介されるのだが、特にそれ以外の情報を聞くことはできなかった。以前は潜力点に関するパンフレットもあったようなのだが、配り尽くしてからは増刷せず、内容はインターネットと全く同じものだという。受付担当者の中には淡水や紅毛城が世界遺産への登録を目指していることすら知らない人もいるほどであった。

また、新北市立淡水古跡博物館は紅毛城、小白宮、滬尾砲台等で無料のガイドを提供しているが、その１人に本件を尋ねてみると、淡水は十分に世界遺産としての価値はあると思うが、それについては政治的な問題を多分に含んでいて、現場の判断で何かをするということはできないという趣旨の説明をしてくれた。現状では台湾の観光地を紹介することに関しては積極的であるが、台湾名義で国際機関への働きかけとなると消極的ということであろう。

このように台湾の世界遺産登録を目指した動きは、民主化に伴う台湾アイデンティティ、本土化で盛り上がりを見せ、その後の国民党政権下ではアピールに消極的となっている。ユネスコ非加盟国である中華民国（台湾）からの世界遺産登録の動きは、多分に台湾社会の文脈を反映しており、政権の方針によってその方向性は大きく異なっている。

4.2　潜力点の中の「日本的」なものの多さ

18ヶ所の潜力点はⅠ.自然、Ⅱ.原住民文化、Ⅲ.植民地下の文化、Ⅳ.国共内戦の戦地と分類できるだろう。こうしてみてみると圧倒的に不足していると感じるのが、いわゆる台湾の漢人的な文化遺産ではないだろうか。例えば台湾では「一府二鹿三艋舺」[9)]として、台湾を代表する歴史的港町を表現するが、これらはいずれもノミネートされていない。その他、新竹や美濃といった客家の文化遺産が入っていてもよさそうなものである。しかし、上記の18ヶ所にはそうしたいわゆる漢族の文化は入っていない。Ⅰの自然は文化遺産ではないので本稿の対象外であるが、Ⅱは中国大陸から来た漢人よりも早い段階から台湾にいた人たちの文化、Ⅲは漢人が来た後、外省人が来る前の外来の文化、Ⅳは

反共、反中の記憶ということだろう。これらに関わるエスニックグループは台湾の原住民、日本人、欧米人となり、これらに含まれない、本省人のうち漢人の文化遺産はノミネートされず、外省人の文化遺産は国共内戦で中華人民共和国と対峙した部分がクローズアップされる。ここにも台湾と中国とを別物として表示するという意図がうかがい知れる。

一方、こうした漢族不在の潜力点の中で突出しているのは日本統治期関係の物といえるだろう。「台鉄旧山線」、「阿里山森林鉄路」、「水金九砿業遺址」、「楽生療養院」、「烏山頭水庫及嘉南大圳」がこれにあたる。これを日本からも支援しようとする動きがみられ、代表的なものが「日本から台湾の世界遺産登録を応援する会」という会である。この会のウェブサイトに掲載されている発起趣旨には以下のような記述がみられる。

> 「4. 現在、台湾の文化資産局が挙げている世界遺産候補地のいくつかは、日本統治時代の文化財でもある。世界遺産候補地でなくとも、台湾にある文化財の多くは日本の文化財でもある。／台湾の人々は、この言わば日台共通の財産の、保存と啓蒙に力を注いできたのである。」（下線は藤野、www.wh-taiwan.com/outline.html より）

こうした台湾の文化財の多くを日本の文化財として、日本統治期を肯定的に捉えるという方針は日本の保守層にある程度好意的に受け取られるものであるだろう。実際に日本語で活字化されている資料の大多数は保守系のメディアに掲載されている［平野　2013等］。さらに、中国の尖閣諸島中国漁船衝突事件（2010年 9 月）や韓国の李明博大統領の竹島上陸、天皇への謝罪要求（2012年 8 月）、竹島の仏像盗難事件（2012年10月）に代表されるような事件により、日本人の旅行先として中国、韓国の人気が下がり、反比例するように台湾の人気が高まっている[10]ことに見られるように、近年、反中国、反韓国、親台湾という国民感情も広がっており[11]、日本から台湾の世界遺産化を支援しようという動きは単に保守層だけにとどまるものということではなく、広報の方法によっては広く支持される可能性を秘めている。

このように、世界遺産行政を通じて台湾側（やそれを支援する側）のゆるやかな政治利用の姿が見え隠れしている。そもそも文化遺産行政は何をもって政治的中立性を担保できるのだろうか。完全に中立な立場で進められるようなものではないのだろうが、ただし、台湾にかんしては東アジアの国際情勢という、他の地域の事例よりもよりマクロな文脈の中でゆれているといえよう。

5　おわりに

冒頭に取り上げたユネスコに加盟していないために台湾に世界遺産がないという問題を再度考えてみたい。国際法や国際政治を専門としない筆者には国際条約がそうなって

いる以上、論理的に批判をする術をもたないが、やはり世界には「世界」遺産に入ることができない地域があるということに、単純な疑問が頭を擡げてくる。この時の「世界」とはいかなるものであるのだろうか。世界遺産とは何かという説明に対してユネスコのホームページでは以下のように述べられている。

> 「世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から現在へと引き継がれてきたかけがえのない宝物です。現在を生きる世界中の人びとが過去から引継ぎ、未来へと伝えていかなければならない人類共通の遺産です。（「世界遺産とは」www.unesco.or.jp/isan/about/ より）」

ここでユネスコが高らかに謳いあげる「現代を生きる世界中の人びと」には入らない人々がいるということであろうか。そのようなものが「過去から現在へと引き継がれてきたかけがえのない宝物」なのだろうか。このようにみてみると若干の違和感を禁じ得ない。

一方で、本稿で明らかになったように台湾側も事実上、世界遺産の政治利用ともとられかねない動きを見せており、こちらも世界遺産の目的とずれがある。台湾社会ではあらゆる局面で、同じものを中国と呼ぶのか、台湾と呼ぶのかということ、つまり自分達は何なのかという根本的な問題と直結してしまう[12)]。

民進党期に盛り上がり、国民党期に沈黙した世界遺産登録を目指す台湾の動きは、今後はどうなっていくのだろうか。台湾では先日の2014年11月29日には九合一選挙と呼ばれる統一地方選挙が行われ、与党国民党が大敗した。小笠原は次回の総統選挙で政権交代すると予測しており［小笠原　2014］、その可能性は低くはないのかもしれない。もしそうなった場合には、再度新たな動きがでる可能性も少なくないだろう。また、近年の選挙結果には台湾の状況だけではなく、東アジアの国際関係といったマクロな影響が見逃せない。従来よりも広い視点からの考察が求められている。一方で、人類学が従来得意としてきた現場に密着したミクロな動きも追う必要がある。本稿ではこうしたミクロな視点を提示することはできなかった。今後の課題としたい。ただし、台湾の世界遺産に関する人類学研究は端緒についたばかりであり、本稿は萌芽的研究として一定の意義があったと考える。

注

1）登録されているのは以下の２ヶ所、１.「ローマ歴史地区、教皇領とサン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ大聖堂」（文化遺産 / 1980、1990）、２.「バチカン市国」（文化遺産 / 1984）（世界遺産一覧地域別リスト（ヨーロッパ③）（http://www.unesco.or.jp/isan/list/europe_3/）より）。

2）チャコ文化（1987）、ハワイ火山国立公園（1987）、シャーロットヴィルのモンティセロとヴァージニア大学（1987）、タオス・プエブロ（1992）カールズバッド洞窟群国立公園（1995）、ウォータートン・グレーシャー国際平和自然公園（1995））。

3）ジャイアンツ・コーズウェーとコーズウェー海岸（1986）、ダラム城と大聖堂（1986）、アイアンブリッジ峡谷（1986）、ファウンティンズ修道院遺跡群を含むスタッドリー王立公園（1986）、ストーンヘンジ、エーヴベリーと関連する遺跡群（1986）、グウィネズのエドワード１世の城群と市壁群（1986）、セント・キルダ（1986、2004、2005）、ブレナム宮殿（1987）、ウェストミンスター宮殿、ウェストミンスター大寺院及び聖マーガレット教会（1987）、バース市街（1987）、ローマ帝国の国境線（1987、2005、2008）、ヘンダーソン島（1988）、ロンドン塔（1988）、カンタベリー大聖堂、聖オーガスティン大修道院及び聖マーティン教会（1988）、エディンバラの旧市街と新市街（1995）、ゴフ島及びインアクセシブル島（1995、2004）。

4）以下の記述は「文化部」サイト（http://www.moc.gov.tw/about.do?method=list&id=2）、および、「台湾世界遺産潜力点」（http://twh.boch.gov.tw/taiwan/index.aspx?lang=zh_tw）による。

5）本表の日本名は「台湾世界遺産潜力点」のウェブサイト（twh.boch.gov.tw）の表記に基づいているが、後述するように水金九砿業遺址、排湾族及魯凱族石板屋集落の２つは2009年に名称を変更したにもかかわらず、本稿の執筆時時点（2015年３月）で修正されていない。今後、潜力点が日本語訳を出す可能性もあるが、ここでは筆者が翻訳した。

6）オーストラリアと中華民国との国交断絶は1972年、米国は1979年であり、それまで使用した。

7）野林が報告したように、故宮博物院で「フォルモサ展」が行われたというのも2003年であり、同じ文脈に位置づけられる［野林 2005］。

8）2005年１月現在、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」と「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」の２ヶ所が長崎と関連する世界遺産候補地となっている。

9）「府」は府城（現・台南）、「鹿」は中部彰化県の鹿港、「艋舺」は現在の台北市内の万華地区を意味する。

10）中国を訪問した日本人の数は尖閣諸島中国漁船衝突事件のあった2010年には3,731,200人であったが、2011年には3,658,169人（前年比－2.0%）、2012年に3,518,153人（同－3.8%）、2013年に2,877,500人（－18.2%）となり、韓国では李明博大統領の竹島上陸、天皇への謝罪要求のあった2012年には3,518,792人であったところ、2013年には2,747,750人（同－21.9%）となった。一方で台湾は2010年に1,080,153人で、2011年に1,294,758人（同 +19.9%）、2012年に1,432,315人（同 +10.6%）、2013年に1,421,550人（同－0.8%）となっている（日本政府観光局　出国日本人数の動向 http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/departure_trends/index.html より）。もちろん、円安等他の要因も考えられるであろうが、中国、韓国と台湾との減少率には大きな差がみられる。

11）「外交に関する世論調査: 韓国に「親しみない」66%、過去最多　中国は83%」毎日新聞　大阪朝刊、2014年12月21日、４面。

12）そもそも、台湾は台湾であって狭義の「中国」に含まれないと考える人も台湾には多数存在している。本書でいう中国地域の範疇には台湾が含まれているが、本稿は台湾を「中国」の一部として扱っているわけではない。

参考文献

●日本語文献

伊藤　潔

2003　「李登輝は台湾「正名運動」の志士となる」『諸君』35（11）。

小笠原欣幸
　2014 「2014年台湾統一地方選挙観察」『日本台湾学会ニュースレター』27。
加治宏基
　2007 「台湾における世界遺産登録申請をめぐる同床異夢」『国際人間学フォーラム』３。
片倉佳史
　2014 「知られざる台湾の「世界遺産候補地」を巡る」『台湾と日本人』（別冊歴史 REAL）洋泉社。
上水流久彦
　2006 「台湾の歴史の語り方」『アジア・アフリカ言語文化研究』71。
　2007 「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」『アジア社会文化研究』８。
張、茂森
　2002 「南船北馬（台湾正名）運動」『問題と研究』31（6）。
中川昌郎
　2003 「ASIA STREAM 台湾の動向 2003年９月 正名運動デモと新憲法」『東亜』437。
野林厚志
　2005 「故宮博物院における「フォルモサ展」──台湾における歴史認識の変化と文化遺産」『民博通信』108。
橋本博之
　1997 「残された文化遺産は歴史の証言者──有形，無形の文化財をめぐる台湾歴史の旅」『観光文化』21（4）。
平野久美子
　2013 「富士山に続け！──かくも美しき台湾文化財を世界遺産へ」『正論』499。
藤野陽平
　2008 「台湾キリスト教の歴史的展開──プロテスタント教会を中心に」『哲学』119。
宗像隆幸
　2006 「台湾正名運動の本質──社会科地図問題に関連して」『自由』48（1）。
李珮瑜，波多野純
　2012 「台湾の産業遺産における保存・再利用の現状と問題点」『日本建築学会関東支部研究報告集』82（II）。

〈ウェブサイト〉 いずれも2015年３月確認
韓国観光公社
　http://japanese.visitkorea.or.kr/
世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（仮訳）（文部科学省ウェブサイト内）。
　http://www.mext.go.jp/unesco/009/003/013.pdf
新北市立淡水古跡博物館
　http://jp.tshs.ntpc.gov.tw/
台湾世界遺産潜力点
　http://twh.boch.gov.tw/
台湾世界遺産潜力点遴選及除名作業要點
　http://www.moc.gov.tw/law.do?method=find&id=461

中国国家観光局大阪駐在事務所
http://www.cnta-osaka.jp/
長崎旅ネット
http://www.nagasaki-tabinet.com/
日本から台湾の世界遺産登録を応援する会
http://www.wh-taiwan.com/
日本政府観光局　出国日本人数の動向
http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/departure_trends/
日本ユネスコ協会連盟
http://www.unesco.or.jp/